

委員コメント（井上（信）委員）

【井上信委員】

○センター長 副センター長の役割分担など

- ・ 組織も大きくなってきたので、センター長が全てのことに細かく決済を下すことはこれまでより困難になってくると考えられる。設備の建設・維持に関する管理等と、研究・利用の管理等を二人の副センター長にそれぞれ分担して責任を担ってもらうようにするなどの工夫が必要である。センター長はセンター長以外の人では担えない役を引き受けるだけにし、余裕を持って総合的判断ができる状態にすべきであると思う。その役割分担が明確でないように思う。
- ・ ミスターJ-PARCである永宮センター長でなければできないのはJ-PARCの広告塔の役である。国内外のユーザーやJ-PARCに期待する人々にJ-PARCがめざすものを説明し、彼らの期待を把握し、それに適切に対応する方策を考えるとといった役割である。内部に対してはJ-PARCの理念を徹底するため職員に理念を明示し、意識改革に努めることである。理念を共有しなくても強いリーダーシップで個々の問題を決済すれば事は運ぶかもしれないが、それではセンター長がいないときには各自がバラバラの行動をとるようになる。文化の異なる2機関からの出向者、委託等様々な背景・文化で育った職員がいるので、センター長と理念を共有する努力はJ-PARCにおいてはとりわけ重要なことだと思う。
- ・ その上で、個々の実務については、副センター長やディビジョン長などに権限と責任を与えて行くべきである。もちろんセンター長、副センター長、ディビジョン長などは互いに緊密に連絡を取り情報の共有ができるような運営システム（会議等）が必要である。体制の図にはそのような会議や委員会のことが書いてないが、明確に位置づけるべきである。このままでは全てのことについてセンター長に指示を仰がねばならないような組織にも見え、それではセンター長はパンクすると思う。

○加速器建設体制

- ・ かつて予算不足が明らかになり、リニアックのエネルギーを下げる事態が起こった。その時、技術及び体制の見直しを行い、JAEAとKEKの共同チームにより現在リニアックが目標のエネルギーでの運転に成功したことは喜ばしいことだと思う。またブースター（3GeVリング）についても入射エネルギーが低くなった状況下で可能な限りビーム強度を上げる努力が成功するものと期待している。
- ・ しかし、かつての見直しするとき、その対象としなかった主リング（50GeVリング）

に関してはややコンセプトや進め方にゆりみがあるように感じる。50GeV リングに関しては実質的に KEK の関係者のみで建設がなされており、いわば KEK 側の請負のように見える。しかし最近暫定的な責任体制であったためか、その請負責任が明確であるというわけでもなさそうである。J-PARC として実際に現場を指揮する強力なリーダーシップを持った人を責任者として認知して権限を委ね全体の設計のコンセプトを明確にし合理的で整合性がとれたものにして頂きたいと思う。4 月からは人員増がなされるようなので、そのような体制の強化を期待する。

- ・ またやがて来るコミッショニング期にはリニアックのようにスッと行けばいいのだが、しばしば色々と苦しむことがある。このようなときも各自がそれぞれの思いでやると混乱するので、コミッショニングチームを作りそのリーダーが責任と権限を持って行う必要がある。今回のような複合加速器の場合はそのことが特に必要であると思うので、体制図では加速器ディビジョンの下にいくつかのセクションがあるように書いてあるが、それとは別に横断的に張り出したコミッショニングチームを位置づけるのがよいかもしれない。またセクションもリニアック、3GeV、50GeV といった分け方もあれば、磁石、高周波、真空・冷却といった分け方もあり、それが建設・コミッショニング期と定常運転時とでは別の方がいいといったこともあるだろう。人数や専門性もウエイトの置き方が時期によって変わるであろうから、4 月からの体制は柔軟性が求められると思う。

○実験施設

(素粒子・原子核)

- ・ 素粒子・原子核関係は共同利用の伝統が最も強い分野であり、研究者の自治組織も明確である。J-PARC の物理に関しては、それは主として KEK の素粒子原子核研究所に結集する全国あるいは世界の研究者である。したがって、その文化を尊重し、KEK 素粒子原子核研究所と密接に連携して最大の成果を挙げるといった目的を共有して、運営されることを期待する。

(物質・生命)

- ・ ミュオンおよび中性子、特に中性子は核研-KEK の計画と原研の計画が統合されて発足した J-PARC 計画のコアとなる象徴的部分である。利用者も単に KENS や JRR-3 の伝統を引き継ぐ利用者だけでなく、自治体や産業界からの利用者も含む、分野も背景も異なる人達で、しかも一つ一つのチームは素粒子原子核のような大きないわばパワーユーザーではなく、多くはスモールサイエンスといってよいものである。早くから原子炉や加速器中性子を利用してきた大学の物性研究者は、ある程度それ

なりの組織や文化の伝統があるが、J-PARC は特に生命系などより幅広い利用が期待されており、中性子科学会が最近結成されたとはいえ、その自治に委ねるまでには至っていないように感じる。また、ユーザー側も J-PARC の運営がどうなるのだろうかという不安感をもって訴えの声をあげているようだが、こうしようという具体的な案を提示してその実現を図るところまで至っていないように見える。おそらくコースごとに、そこに集まる研究者のもつ背景や文化が異なるであろうから、それらを尊重しつつ、全体として成果が最大になるような運営の仕組みを構築することが望まれる。異文化を尊重しつつ互いに身近にすることで融合された新しい文化が生まれさらに新しい成果が出ればすばらしいと思う。

○ユーザー支援体制

- ・ 中性子のユーザーは放射光（X線）の場合より導入期のバリアが高いと考えられるので、支援スタッフが不可欠である。やや気がかりなことは、最近の法人化によって成果と評価の圧力が現場の研究者にかかり、支援業務の位置づけをよほど明確にしておかないとユーザーにとって満足できない状況になるおそれがあることである。これは担当者個人の資質の問題ではなく成果主義と忙しさという組織のあり方に起因する問題のように思う。とはいえ研究能力のないものを支援スタッフにして貼り付けておけばいいわけではなく、とりわけ中性子の場合には初期の利用者に対しては研究者としての能力が優れているものがユーザーと共に技術開発をすることが優れた成果を生み出すもとになると思う。したがって支援スタッフにとって分かりやすく安心できる適切な評価システム・キャリアパスに対する配慮が必要であると思う。

○追加経費

- ・ 最近では競争的経費が増えてきたが、基盤的経費は減っている。若手には若手奨励枠があり、有名教授には集中的に競争的経費が来る傾向があり不祥事が起こるほどであるが、こつこつ地味にやっている中堅研究者は 10 万円の捻出も苦しいといった歪みが出ている面がある。優れた研究の場合には追加料金についても優遇措置などの工夫があってもよいと思う。